仙台教区報

発行所 カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二(22)七三七一番
編集・発行人　首藤　正義

教会における青少年の健全育成

笹気　直哉

若者の教会離れ

いつの頃からだろうか、若者が教会へ足を運ばなくなったのは。受験戦争ということばが定着し始めた頃だったのか、学園紛争華やかなりし頃だったのだろうか、あるいは、やさしさなどということばがうけていたときなのだろうか。

いずれにせよ、戦後まもない頃、朝から夜まで公教要理の勉強に追われ、カトリック・アクションの指導に明け暮れていたと述懐する老司祭のことばに、ただ溜息まじりに、「そうだったんですか」と聞き入るのみである。

教会の若者離れ

もしかすると、若者が教会から去ったのではなく、教会が若者をあてにしなくなったのかも知れない。

親は子に対して、よかれと思うことをどんどんやらせたくなるもの、時にやり過ぎたとしてもである。

教会は、若者にどれほど積極的によかれと思うことを提供してきただろうか。

若者に用事があるとすれば、教会行事の労働力のみ。

本当でしょうか

他人に迷惑をかけない人
わがままをいわない人
悪いことをしない人

私たちの社会で、最も大切な価値基準とされている要素のように思いますがどうでしょうか。右のようなことをきちんと守れる人になるよう育成するのが「青少年の健全育成？」

本当のこと

他人に迷惑をかけない最も良い方法は、他人と関わりをもたないことです。

人間誰しも、「何々したい」という欲求があってこそ生きられます。我が意のままにしたいという欲求を受けとめ合ってこそ、次第に深い関わりができてくるのです。

悪いことをしないだけでなく、良いことをすることによって、互いに助け合うことが可能になるのです。

互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。（ヨハネ15の17）

派遣

父は子を世に遣わしました。子は弟子たちを世の人々の中に遣わしました。遣わすにあたって世の価値基準（お金や杖）ではなく、福音の価値基準を授けました。

私たちにとっての若者の育成とは、福音の価値基準を身につけさせることであり、かつ、教会から世に派遣することです。

行きましょう。主の平和のうちに！

司教日程（2月20日現在）

2月28～3月8日　ローマ
3月9日　カトリック医師会仙台支部総会
11日　司祭評議会
12日　教区司祭団役員会
13日　桜の聖母短大卒業式（福島）
14日　カリタス・ジャパン事務局（東京）
16日　白百合短大卒業式（仙台）
17日　司牧評議会
18日　カリタス・ジャパン事務局（東京）
20日　社会福祉法人理事会（仙台）
21日　司祭叙階式（元寺小路）
22日　中央協・財務委員会（東京）
23～24日　カトリック書道展（盛岡）
27日　ウルスラ会管区総会ミサ（仙台）
4月3日　聖香油ミサ・司祭候補者認定式（元寺小路）
4～6日　聖なる過越の三日間（元寺小路）
7日　復活主日（元寺小路）
8日　教区司祭団役員会（仙台）

子どもにも
父なる神を知り
愛する権利がある

岩手カトリック・センターが『家庭における信仰教育』の手引を刊行

家庭における子どもの信仰教育の重要性が叫ばれているが、そのために何をどうすればよいのか、父母たちの疑問に答えてくれる適当な手引書も少ない状態である。とくに、就学前までの幼児を対象とした信仰教育の手引書はほとんど見当たらず、その必要が痛感されていたところ、このほど、岩手カトリック・センターが、そうした若い父母たちのために、司祭・伝道婦・父母たちグループの手作りによる手引書を刊行した。

これは、岩手地区信徒連絡会の提案に基づき、佐藤千敬司教の呼びかけ（一九七九年の司教教書『子供たちの幸せのために』）に応えて、県内各教会で家庭における子どもの信仰教育のあり方について考えようという運動を展開し、そこで出された経験・意見・疑問などを踏まえて、カトリック・センター内の「信仰教育の手引作成委員会」で話合いを続け、それを次のように体系化してまとめたものである。

第一章　信仰教育の目的
第二章　信仰教育と祈り
第三章　日常生活における信仰教育
第四章　典礼を通しての家庭の信仰教育
第五章　家庭の行事などを通しての信仰教育

その内容は、第一章では「小さい子どもに信仰教育をする必要があるのか」「神について子どもにどう話せばよいか」など6節、第二章では「子どもの祈りに対し親はどんな役割を果たすべきか」「子どもが祖父母や幼稚園の先生から他宗教の祈りを教えられた場合どうすればよいか」など14節、第三章では、「近所に遊ばせたくない子がいるときどうすればよいか」「テレビを見せるときはどんな注意が必要か」など12節、第四章では「家庭で典礼暦をどう生かすか」「待降節をどのように過すか」など18節、第五章では「誕生日のお祝いをどうするか」「お祭りには参加してもよいか」など9節で、合せて59節にわたり、それぞれにつき具体的かつ簡潔に説明を加えたものである。各節の末尾には、聖書・祈禱書・憲章・回勅などからそれぞれ関係の深い部分を抜粋し掲載している。

岩手県内の各教会では、この手引書を各家庭で活用することを勧めるとともに、教会ごとに若い父母たちの集会をもって、こうした内容について今後とも話合いをつづけようという動きが起こっている。また、教会によっては、教会で結婚式を挙げる新郎新婦にもれなくこの本をプレゼントしてはどうか、といった提案がなされているところもみられるようである。

なお、信仰教育の手引作成委員会は、本書の刊行について「各教会で討議に参加してその完成を心待ちにしておられた方々と、この仕事に関心を示され見守ってくださった仙台教区内の司教様はじめ司祭・信徒の方々に対し、御協力を感謝申し上げるとともに、刊行の遅延を心からお詫び申し上げます。この小冊子が、子育てをしている父母の方々に、いくらかでも参考になれば幸いです。また、お気づきの点は何なりと御教示いただければ有難く存じます」（本書あとがき）といっている。

この手引の書名およびお問い合せ先は
『家庭における信仰教育（幼児編）』
（B6版・92ページ・定価五〇〇円）
020　盛岡市本町通二丁目12－25
岩手カトリック・センター
（電〇一九六－54－〇五五七）

叙階式・認定式が行われる

3月21日、ミカエル佐藤修助祭（野田町教会）が元寺小路教会で司祭叙階を受ける。又、4月3日には十字架のヨハネ会津隆司神学生（四ツ家教会）が元寺小路教会で認定式を受ける。

マリア・テレジア横島ハル子様

横島健二神父様（元寺小路教会主任）の御母堂、マリア・テレジア横島ハル子様が、昭和60年2月19日12時50分、ご自宅で帰天されました。（享年78歳）　葬儀ミサは2月22日午前11時、弘前教会にて横島神父様司式のもとにささげられました。

故人の永遠の安息のために祈りましょう。

ブラジルを訪ねて(3)

東仙台　長井　和子

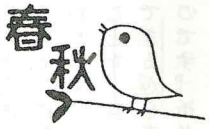
真っ白い砂浜にうちよせる大西洋の波。新天地を求めて長い旅路の果てにたどりついた人々の第一歩が、このサントスの港から始まった。

ブラジルの6月、冬の訪れ初めた頃、76年前笠渡丸は日本からの移民を乗せて入港した。不安と期待の交錯のなかで昼夜をとわず鍬をとり、大地を切り開き、暑さと病気、貧しさとたたかいながら、コローノとして生き初めた。

以来多くの日本人が海を渡り、今はブラジル社会に根づき、その文化の一端をになっている。日本人は、ブラジル文化の根がカトリック信仰であることを直感し、ブラジル社会に受け入れられるように洗礼を受けた。言葉と習慣の異なる彼らの信仰生活を心配したブラジル司教団は、日本人宣教師の派遣を依頼したが、外人宣教師に頼る当時の日本教会では海の向こう、地の果ての同胞にまで手をのばすすべもなくいた時、長崎教区の中村長八神父様は58歳の高齢にもかかわらず、勇躍海を渡られ、サンパウロ奥地での広漠たる宣教地での活動が始められた。宣教師としての愛と勇気は、最後の写真の神父様の靴の穴が全てを物語ってくれる。中村神父様の宣教の歴史は今、宣教師一人ひとりの心の中に、心の灯、真理と信仰を、愛と勇気を、言葉と行いに一致させるものとして生かされている。現在100人に及ぶ宣教師・シスターが渡伯し、ブラジル全土で、日系人はもとより、ブラジル教会で働いておられる。時代は変わっても、その苦しみ、きびしさに変わりはないが、宣教師たちは皆あかるく元気に働いておられる。

しかし多くの二世・三世たちは今もキリストの共同体の外で生きている。彼らは幼少の頃、見・聞きした前世紀の教会のイメージしか持っていない。宣教師たちは彼らに、現実の教会の息吹きに触れさせ、貧しい人々に連帯する教会への参加、信仰と忍耐、兄弟的一致、祈りの分かち合い、奉仕の教会への参加と出会いのために働いておられる。この中には特に青年司牧に情熱を燃やして働いておられる堀江神父様、遠い僻地の日本人を訪ね慰められる千葉神父様、ファベラの子供たちに基礎教育と生活指導をするベタニア会の4人のシスターたち仙台教区出身の宣教師たちがいる。私たちはしばしば「仙台教区の同窓会」と言っては集まり、祈り、話し合った。家族や友人たちから送られてくる教区報や手紙を見ては古里の教会を思い、慰め励ましとしている。

宣教師たちは年に一度、パニブの宣教者大会にブラジル全土から集まり、祈り学び、分かち合いの場となっている。そこは兄弟愛と召命の一致を感じる場でもある。あらゆる場でする体験を分かち合い久し振りの出会いで語り合う時、宣教師たちは互いに内的に強められ、また宣教の現場へとかりたてられるように戻っていくのである。その姿は、イスラエルの各地をまわられるイエズス・キリストそのかたである。



去年、俳優の伊丹十三氏が映画「お葬式」を作り、新人賞を受けて話題になった。

受賞後、伊丹氏がインタヴューを受けているのをテレビでみた。「初めての映画製作に、人が避けたがるこのようなテーマを何故選んだのか」の問いに、彼は次のように語った。「ひとは生まれ、そして死ぬものである。お葬式は日常の事柄である。ひとはいつもそれを見ている。私はそれを見つめてみたのです」

「見る」「見つめる」のことばが心に残る。

見る限りにおいては何事もなく単調に写った事柄が、見つめた時、そこにドラマがあった、というのである。

聖書との出会いにおいても同じことがいえそうである。一つのみことばを聞いて、どの場面かを言い当てる人がいる。また、そのみことばの箇所の章節までも言える人がいる。そのような人に会うと、その記憶力のスゴサに驚かされ、ただただ頭が下がる。

しかし、聖書を見つめるとは、一つのみことばがひとを捕え、いつしか生きる姿勢が問われる、というドラマが起こることに違いない。

（狼河原）

「福音宣教」

練成会に参加して

聖ウルスラ会　猪岡　庫

福音宣教とは、言葉を変えて言えば〝愛〟の一語に尽きる。これがこの練成会に参加して最終的に得た私の結論でした。

教皇パウロ六世の「福音宣教」を手引きにブラザー・ラベルの熱心な指導のもとに行なわれた二泊三日の練成会は、私の目を開き、心を燃やしてくれました。東仙台教会主任の首藤神父様が企画され、一月末に行なわれたこの練成会には、17名の参加者があり、特に直接に小教区を司牧しておられる神父様方やカテキスタの方々とご一緒させて頂いたことは、私にとっては得難く貴重な体験でした。

このような直接的司牧にかかわる練成会は初めてでしたので、尚更、心が揺さぶられるような新鮮な刺激だったのだと思います。終始、熱のこもったブラザーのご指導もさることながら、宣教のいわば第一線で献身しておられる方々の生のお声に接し、そのご苦労も喜びも分かち合って頂いて、本当によい勉強になりました。むさぼるようにおききいたしましたし、私なりの意見も率直に述べ、真剣に参加して、心地よくはりつめた三日間でした。一日の終りにご聖体の前で皆が心を一つにして祈りました。ほんの短い時間でしたが、この時、上からの光と恵みが皆の心に満ちたのではないかと思います。私もこの短い時間に、自分の存在の根源であるおん父を本当に深いところで体験したように思います。おん父がおん独り子を与える程世を愛されたこと、おん子は十字架上で命を与える程私共を愛されたこと、聖霊において神の愛なる永遠の生命の水が、滔々と私共のうちに流れ、この流れは私共を経て多くの人々に伝わるべきことを観想したように思います。この大きな流れの中で私の存在を眺めてみました。おん父がおん子をつかわされたように、キリストは私をつかわされました。おん父のはかり知れない愛のプランの中で、世の始まる以前からキリストによって選ばれ、無償の愛につつまれたこの私は、この生命の流れを他に流し続けなければなりません。同じ恵みに浴した共同体と共に。おん父から一切を受けたおん子が、私共に一切を与えて下さったように、私共も他にそれを伝えるのです。これが私共の存在理由なのです。

日々押し寄せて来る情報の波、舞い込んで来る紙の束、はんらんする言葉の中で、私の心は鈍くなっていたようです。家に帰ってから、あらためて「福音宣教」「日本の教会の基本方針と優先課題」「年頭司教書簡」を熟読いたしました。そして、私に具体的に何ができるかを主のみ前で真剣に考えております。きっと主は、具体的な道を示し、呼びかけて下さることと思います。

5月6日に私共17名は再び集まることにしております。この練成会が、具体的な実を結ぶことを、参加者一同が切に望み、各自、何ができるかを考えてこようということになったのです。祈りつつ、主の呼びかけに心の耳を澄ましている昨今です。

フィリピン

体験学習＝その五

フィリピンでのホームステイは実に印象深いものだった。フィリピンが貧しい国であるということは知っていた。しかし、案内された家に入った時、私はその貧しさに愕然とした。その表情を見てとったのか、ホームステイ先のママは私に、「私達はとても貧しい、けれど心は豊かです」と語ってくれた。そして私はこの三日間を通し、彼らはまさにキリストの教えを生きている人達だと思った。彼らは以前から私達を知っていたわけではない。けれどそんな私達を引き受けて、自分達の食べ物を減らしてまで歓迎してくれたのである。私は、すばらしい隣人愛だと思った。

ところで、今年は国際青年年である。このような生きにくい世の中にあって、青年として、ますます広い視野を持ちたいと思う。フィリピンの人々が、国の違いを越えて、隣人として私に接してくれたように、私もしていきたい。自分自身を見つめ直すという意味でも、本当に実りのあった体験学習であった。

（斎藤　千津）